

〈記録〉

## 1990年代以降の台湾における環境保護社会運動

——ドキュメンタリーフィルム監督・陳麗貴氏／李泳泉氏インタビュー

楊 韜

実施日時：2014年7月10日10～12時

実施場所：名古屋市千種区不老町

「グリーン・サロン東山 Green Salon Higashiyama」

聞き手：楊韜

### 【解題】

台湾の環境保護社会運動には長い歴史がある。そのなかで、核心的な役割を果たしているのが民間組織「台湾環境保護聯盟」による運動である。「台湾環境保護聯盟」は1987年の成立以来、「原発反対」・「汚染反対」・「水資源保護」・「森林を救う」などの理念を掲げ活動を続けている。2007年、ドキュメンタリーフィルム『捍衛台湾郷土紀事：台湾環境保護聯盟20年』が製作され、1990年代以降の台湾における環境保護社会運動の歴史が振り返られた。本インタビューは、このドキュメンタリーの監督を務めた陳麗貴・李泳泉両氏の協力を得て、台湾における「反核（原発反対）」運動の一端の聞き取りを行った記録である。

キーワード：社会運動、台湾環境保護聯盟、核4公投、林義雄

※※※

楊：陳監督、李監督、こんにちは。本日は、どうぞよろしくお願ひ致します。

陳／李：こちらこそよろしくお願ひ致します。

楊：まず、お二人が台湾環境保護聯盟と、最初に出会ったのはいつ頃です

か？

李：聯盟の初代会長である施信民<sup>(1)</sup>は、1986年前後に訪問研究員としてアメリカのテキサス大学オースティン校に滞在していました。ちょうど私たちもそこに留学していて知り合いました。施信民は台湾へ戻ると、1987年に「台湾環境保護聯盟」を設立しました。私たちも1989年に台湾へ戻り、その後台湾環境保護聯盟と関わるようになりました。

楊：1987年に「台湾環境保護聯盟」が設立された時、台湾ではもう「反核」運動はありましたか？

李：ありました。1987年以降、徐々に規模が大きくなりました。その背景は、おそらく民進党（民主進歩党）の躍進とも関係があります。当時、民進党が選挙において大躍進し、多くの党員が地方議員や立法委員に当選することができました。「社運（社会運動）」と「政運（政治運動）」の両方が力を合わせるような状況でした。

陳：私は、「社運」と「政運」を区別する必要があると思います。民進党の一部の党員は、最初に「社運」に参加し、その後「政運」へ転じたわけです。

李：当時の「社運」と「政運」において、人脈はかなり重なっていて、相互支援を行っていたと思います。だから、当時の環境保護運動も大規模になっていました。私たちも台湾環境保護聯盟の活動を支持しました。私は当時、世新大学で映画論を教えていました。仕事の関係上、一部の活動しか参加していませんが、私の学生も参加していました。たとえば、貢寮<sup>(2)</sup>反核運動のとき、私は行けませんでした。学生に行かせ記録させました。この作品（『捍衛台湾郷土紀事：台湾環境保護聯盟20年』）のなかに出てくる貢寮に関する映像の一部はまさにその時に撮影したものです。

陳：私たちはアメリカに留学したとき、いろいろなものから啓発されました。台湾へ戻り映像記録の方法で社会運動へ参加したいと、思っていました。

楊：「啓発」とは、具体的にどのようなことですか？

---

(1) 施信民：国立台湾大学教授、核四公投促進会呼びかけ人。

(2) 貢寮：台湾新北市の地区、龍門原子力発電所、所謂「核4＝第四原発」の建設地として知られる。

李：大きく分けて二つあったかと思いますが、まずは、政治に対する認識です。私たちは台湾にいた時は、政治についてあまり知りませんでした。1983～1984年、私は台湾留学生組織「テキサス大学台湾同学会」の会長を担当しました。当時テキサス大学で教えている陳美霞先生は同学会の顧問でした。陳先生の御主人は林孝信<sup>(3)</sup>で、「保釣運動」<sup>(4)</sup>の中心人物です。林孝信は当時シカゴにいましたが、時々オースティンに来て、若い留学生たちと交流していました。彼は、よく「社会主義」など、政治に関する話をしました。当時の私たちにとっては、「社会主義」などの政治概念に接する良い機会でした。この意味では、私たちの政治的啓蒙と言えます。もうひとつは、映画学です。私はアメリカに留学し、映画学を専攻しました。渡米以前、所謂普通の映画しか観ていませんでしたが、アメリカ留学中、たくさんの映画、とくに人々を深く考えさせるようなドキュメンタリー映画を数多く観ました。そこから、映画の可能性を発見しました。欧米諸国では、ドキュメンタリー映画は社会運動推進する「助力」と看做されています。すなわち、ドキュメンタリー映画は社会運動と常に密接にかかわっています。私たちが留学の後半の頃から、将来台湾へ戻り、映像という手段を使って台湾の社会運動を支援しようと思い始めました。

楊：アメリカ留学中に知り合ったご友人たちも、その後お二人の台湾での活動に大きな影響を与えたのでしょうか。

陳：はい。当時アメリカで出会ったたくさんの方は、台湾島内の人と大きく異なっていました。彼らからたくさんのことを学び、私たちの人生が大きく変わりました。台湾の社会運動に参加するようになったきっかけとも言えます。

楊：アメリカ留学中に知り合った人々とは、その後も交友関係が続きましたか。

陳：はい。たとえば、台湾環境保護聯盟のメンバーである施信民や高成炎たちです。彼らは、今でも台湾の「反核」運動の中心人物です。もち

---

(3) 林孝信：台湾『科学月刊』創刊者、「保釣運動家」として知られる。

(4) 保釣運動：1970年に日本政府が尖閣列島（釣魚島／台）の日本帰属を宣言したことに対してアメリカの諸大学の台湾や香港の留学生がデモなどで抗議した運動。

ろん、いまは「緑色公民行動聯盟」など若い人たちが中心に活動する組織もあります。

※※※

- 楊：林義雄<sup>(5)</sup>とは、台湾環境保護聯盟を通して知り合われたのですか。
- 陳：台湾環境保護聯盟の友人を通して知り合いました。1994年、立法院は8年間の予算案を一括で承認しようとしてしました（本来は、年度ごとに言うはずですが）。しかし、年度ごとの審議で毎回大きな反発を招いたため、一括で審議し承認しようと思っただけです。そのとき、林義雄は「禁食（絶食）」を行い、反対運動を起こし、「公投（国民投票）」を呼びかけました。
- 楊：「禁食」というような方法は、それまで考えられたことはなかったのでしょうか。
- 李：いいえ。高成炎も提案したことがあるようです。
- 陳：誰が先に提案したのかは確認しないと分かりませんが・・・
- 李：ほぼ同時だったと思います。
- 陳：林義雄は、「禁食」という行為で「民意による問題解決」を国民に認識してもらいたかったのではないのでしょうか。
- 楊：「公投」は、おそらく多くの民衆にもともと多かれ少なかれ意識があったと思いますが、林義雄の「禁食」行為を通じて、より多くの人々に注目され、理解してもらったようにはなっていないかと思います。
- 陳：そうですね。「核4公投」<sup>(6)</sup>問題もそうです。林義雄を救うため「反核団体」は「核4公投・10万連署」を起こし、10万人の反対署名を集めようと呼び掛けました。6日間で11万件以上の署名が集ったと言われています。
- 李：林義雄は一貫して「民意による決定」を重視しているようです。彼は、民衆には「自分で決める権力がある」という認識を高める必要があると考えています。このような認識のもとで政府に圧力をかけていく方

---

(5) 林義雄：台湾の弁護士・政治家、民主進歩党の元主席。

(6) 核4公投：龍門原子力発電所の建設是非をめぐる国民投票。

法です。

楊：林義雄は「禁食」のほか、「千里苦行」<sup>(7)</sup> も行いましたよね。

李：1994年9月、林義雄は「千里苦行」を始めました。

陳：この作品（『捍衛台湾郷土紀事：台湾環境保護聯盟20年』）にもそのときの記録映像があります。

楊：当時の反響は大きかったですね。

陳：はい。普通のデモ進行は群衆と宣伝車で自らの訴えを発信しますが、林義雄が行った「千里苦行」は違います。この活動は台湾島内を回り、数日から数十日間も続きます。日ごとの参加者は多くありませんが、数日の合計ではかなりの人数に上ります。一過性のデモ進行よりも参加者は多いです。

李：「千里苦行」の台北地域での参加者は多かったのですが、他の地域では多くありません。しかし、各地の巡回では、現地の民衆が加わって来ますし、飲み物などの支援物資の提供もあります。各地を回りながら、ビラを配布し、より多くの地元民衆に知ってもらうようにしました。また、「千里苦行」の実施にあたっては、参加者はずっと静粛にしています。参加者の一群は行軍のように前へ進みますが、隣同士喋ることもほとんどありませんでした。非常に規律的です。

楊：「千里苦行」の発想はどこから来たものでしょうか。

李：ガンディーの「非暴力、不服従」などとも関連があるかと思います。林義雄はそれについて研究しているようです。また、彼は台湾本土の要素も取り入れている。たとえば、参加者が進行中に笠を被るようなことなどです。

楊：たしかに笠を被って行軍する参加者の姿は印象的です。日本の「四国八十八箇所遍路」を連想します。元首相の管直人も「四国お遍路」を歩いたことがあるようようです。彼は福島原発問題への思いを「遍路」に込めていたと言われています。

李：林義雄の宗教信仰については分かりませんが、それなりに仏教について研究しているように思います。「笠」に関しては、個人的には台湾

---

(7) 千里苦行：林義雄らが呼びかけ、実施している抗議活動。台湾島内を徒歩で回り、「核4」建設の反対を訴える。

の農民、或いは台湾の郷土を象徴していることもあるかもしれません。

※※※

楊：「千里苦行」には、お二人は参加されたことがありますか？

陳：はい。私は施信民や高成炎を知っていますから、第一回の「千里苦行」の時から声が掛かりました。当時、私は台北市女性權益促進会の理事を担当していたこともあって、女性代表として参加しました。

楊：全期間の参加でしたか？

陳：いいえ、全部ではなかったのですが、かなりの期間参加しました。

李：私は仕事があったため、空いているときのみ記録を撮りに行きました。撮った映像のなかに彼女(陳)が映っているシーンは多かったです。

陳：そのせいか、林義雄はいまでも私が全期間にわたって参加したと思っています。これはドキュメンタリーの面白いところですね。その映像が歴史記録となりました。私はそのなかで多く登場していますから、皆私が毎回参加したと思ってしまいます。

楊：はっきり確認していませんが、この作品(『捍衛台湾郷土紀事：台湾環境保護聯盟20年』)には陳監督の姿もあるようですね。

陳：この作品では多くないかもしれませんが、別の作品『千里苦行』ではかなり多いです。

李：この作品だと、たとえば、1995年か1996年のデモ進行中に「妊婦隊」がありましたが、陳監督はそのなかの一人でした。

楊：「妊婦隊」といえば、印象に残っています。

李：「妊婦隊」の皆さんは服の下に風船を入れていました。

陳：真ん中の「妊婦」は私です。実は、私がこの映像の編集を担当したので、自分が映ったシーンはほとんどカットしました。

※※※

楊：『捍衛台湾郷土紀事：台湾環境保護聯盟20年』という作品はかなり長いスパンで製作されていますが、使われた映像資料についてお聞き

できますか。

李：この作品は2007年に製作されたものですが、1989年以降撮影した記録映像が多数使用されています。これらの記録映像は、別に何か決まった作品を製作しようとして撮ったものではありません。日頃撮りためてきた素材です。2007年、台湾環境保護聯盟20周年記念で新しい作品の企画があり、ちょうどこれまでに撮りためてきた映像資料の出番となったわけです。

楊：なるほど。つまり、1989年以降撮影してきた数多くの断片的な映像資料が整合され、この作品の基礎となったのですね。20年間という比較的長い期間なので、台湾での環境保護社会運動においても、一つの時代となるでしょうね。

李：基本的にはそうですね。20数年が経った今、台湾環境保護聯盟の影響力は弱まりました。ほかの環境保護組織も現われています。とくに福島原発事故以降、若い世代の活躍が活発となっています。台湾環境保護聯盟の最盛期はやはり1990年代です。当時の参加者の多くは学生でした。彼らは卒業後様々な仕事につき、様々な機関に吸収されました。一部の人は政界へ転じました。

楊：当時の学生たちが「反核就是反独裁（原発反対＝独裁反対）」というスローガンを打ち出していたことは大変印象的でした。このようなスローガン、或いは考え方はどのように生まれたのですか？

李：これは林俊義<sup>(8)</sup>が1980年代に提起したものです。私たちがアメリカから戻る前にすでにありました。

陳：当時は台湾ではまだ「戒嚴令」が敷かれていた時代でした。大体、1985年頃でしょうか。林俊義は『反核就是反独裁』という本を出版したそうです。

李：林俊義はアメリカで生物学を専攻していました。

陳：彼は後に東海大学で教えています。彼は、台湾の反核運動の先駆者の一人と言えます。しかし、彼は政界へ転じた後、次第にフェードアウトしました。

---

(8) 林俊義：台湾の生物学者、台湾環境運動の先駆者。

楊：社会運動者が一旦政界に入ると、このような結末となるケースは多いように感じますが・・・

李：こう言う人がいます。社会運動をする時には、社会問題の解決を促進するように行動する。しかし、政界に取り込まれ、ある政府機関のポストに就くと、あまり「促進力」とはならなくなります。そして、再び政界から民間へ転身し再度社会運動へ力を注ごうとするが、それはなかなかいかない。なぜなら、すでに社会運動に従事する正当性がなくなっているから。言い換えれば、一度政界入りした人は、社会運動を推進する身分や立場を失ってしまうのです。

陳：要するに、政府機関の要職に就いても社会運動者からの訴えを解決できなかったのだから、後に自分が社会運動者と同じ身分で政府機関へ訴えても正当性がないわけです。

李：そういう理由で、かつて政界入りした人が社会運動を支持しても、再び表舞台に出ることは難しくなります。

楊：したがって、社会運動者は政界との距離を保つことが大事ですね。

李：このことに関しては、林義雄はうまく自分のキャラクターを演じているように思います。彼は、民進党の主席を務めた経験のある政治家です。しかし、ずっと政権と距離を置きました。彼は、在野の立場を選び、ずっと社会のなかで自分の居場所を確保してきました。そうであったからこそ、一貫して自分の意志で物事に対処できたのです。

陳：これも、林義雄がずっと人々に尊重され続ける理由です。

※※※

楊：今年（2014年）3月の「太陽花学生運動」と、その直後に行われた林義雄の再度の「禁食」運動には、どのような関連性がありますか？

陳：今回の「太陽花学生運動」は広範囲の人々に呼びかけました。これまであまり政治に対する関心のなかった民衆もその呼び掛けに応じてくれました。林義雄の「禁食」活動もその恩恵を受け、大成功を収めたわけです。両者の動員における社会ネットワークに連続性があったように思います。林義雄の「禁食」がこれほど高い支持を受けたのには、

「太陽花学生運動」の大きな影響がありました。

楊：今回の「禁食」活動を経て、「核4」の建設は凍結されました。これは台湾の環境保護運動史上において大きな成果だと思います。今後の環境保護運動、とくに原発反対運動の趨勢についてどのように予測されますか？

陳：「核4反対」に関しては、これで一旦収束したと思います。なぜなら、「核4」の建設中止は明白となったからです。

楊：少なくとも「核5」や「核6」が現われることはないでしょう。やはり20年以上に続いてきた社会運動のシンボリックな出来事ですね。

陳：台湾環境保護聯盟の20年の歴史は、すなわち台湾社会における「原発反対」運動の20年史です。

